
Tears of blood and Calling out of soul

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tears of blood and Calling out
of soul

【Nコード】

N1490C

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

創作活動の際、どうなるのか。自分はこうなります。

血の涙

地名(？)三部作で生まれて初めて小説という物を書いた。
今迄は読むだけであつたが、いざ書くとなると、なんと難しい事が。
血の涙が出まくる。

視点？なにそれ。よくわかりません。

何人称とか、全然知らずに書いた。

今もそうなんです。

そこは気にせず書いています(気にしろよ、おい)。

地名三部作の話し自体は全部出来ていたし、細かい設定は以前から
決まっていた。

ノリと勢いで誤魔化そう。

しかし・・・。

推敲しても推敲しても誤字脱字が出てくる。

「まだ出るか、貴様らあああーーーーー!!」
泣きそう。

「日本人なのに、日本語が奇つ怪すぎるうううーーーーー!!」
もう書いてる自分は日本人でなくていい。

「句読点がうぜええええーーーーー!!」
一から三部作を見直し、憤死した。

でも、自分の中では完結しているお話であるからして、
手を入れる気にはならなかったんだよ。

- - - - -

地名三部作を書き終わり、四文字熟語三部作を頭の中でいじっていた。

話の筋は大まかにできた。あとはどの設定でいくか……。ゲーム上の設定があるとはいえ、自分の中ではどの設定を採るか悩んだのであった。

多分こつちでないと書けないだろうと思い試作品を書いてみる。書いた後、話が全部収まりしかも場面場面がぶかぶか浮かぶ。

こんな事があるのかよ、と思いつつタイトルの選択で悩む。暗喩でこつちを採るか、あつちを採るか。

こつちのタイトルが「俺にしるよ。損はさせねえ。」と言わんばかりに自己主張する。

細かい表現を決めていく時点で出てきた候補。

あつちだと、更に苦労するのは目に見えてるし……。

話しの終わりは君を候補に上げた時点で文字に出来たしなあ……。

「サブタイトルもそれで決まるじゃない。」

それもそーですな。

なにか一つ、書いてて色が付くものが出てくるからま、いつか。幾つかは決まっているのもあるし、何とかなるさ。

そんな気軽な気持ちで書き始めて、数話書いた後、詰まる詰まる。

「うおおおおー！ー！！タイトルで首絞めたあああー！ー！！」

12〜3話くらいで終わるだろうと思って書き始めたんだよね。予定が狂い、こら16〜7話くらいになるなと思って構成を変更した。

前編後編に分けて自分に区切りを入れないと書けません。

「長げえええええー！ー！！」

前編書き終えた時点で前編後編で収まらなくなった、と思った・・・。

最初から解つてたらあんなに伏線張らないッス。

もう、涙目。

「畜生——！！市ねと言うのか！！真でやるさ！！」

「腐れてるな、てめえ。」

とある一言で腐った竜を思い付いてしまった。

「なんで逸れる！でも書きてえええええええええー！！！」
書いた。もう、どうとでもなれ！

思えば出だしで悩んだんよね。あれをどう表現するか。

自分の中で不覚になりやいいんだ、それでいいのさ。

いや、他に思いつかなかったからなんだが……。

「そもそも不覚を．．．さんえーが公式発表してくれたら．．．．．
だあああああ！！」

推敲しすぎて脳内麻薬が出まくった。

異様なテンション。

「君達……本當に生禿にする氣かね……」

変な番外編を書いた。

どこまで書くか、書かざるべきか。

自分なりに色々表現にも気を遣った。

とにかく後編一通り書き上げて推敲のみが残るまでにもっていったんですな。

四文字熟語三部作ばかり書いていると飽きるんだよ、これが。

だから、以前から暖めていたお姉様の話を同時にこっそり書いてましたよ、ええ。

ヴアルキリーのイメージは全てVPからきてるんですね。だから末は蒼穹なんだよ。決定事項なんだよ。だってVPした時から中が浅葱にしか見えなかった。

だから夜朝昼のイメージが出来たし、こればかりは崩せない。それはひとまず置いて・・・。

おでんが・・・どうするべ・・・。

この二人の微妙かつ複雑な関係を、日本語に出来ません・・・。
タイトルは・・・。

何も考えずに半分書いて塩漬け。

長い話は終わりが決まっていたし、話自体は出来上がっていたから何とかなった。

短いのはマジでノリと勢いで書いた。

お姉様はうすぼんやりではつきり見えてこない。

いいさ、完成しなくても。

伏線なんて張っていない話だし。

へっばこな詩が伏線だし。

てか、詩って「。」を使ったか・・・？

不安不安不安。吹き飛ばさなくては。

自分は日本人ではない！カルスタット人だ！！

- - - - -

四文字熟語三部作が終わり、以前の地名三部作を読み返す。

ああ、恥ずかしくて顔から火がでまくる。

そっついや、こっち最近書いてないな！。

あれからは具体的に浮かんでこなかったし・・・。

脳みそがウニになっている状態。トランスしていたんだ、多分。

「あ、浮かんだ。」

書いてしまえ！後は野となれ山となれ！！

異様なテンションの番外編を読む。

まあ、四文字熟語三部作の後の話が無いわけではないが・・・。
しばらく君達とは距離を置かないとね。

妹さんまで手を出すと、王族設定全て吐き出す事になるし。

自分なりの設定出す事になるから、それもどうかと思うし。

手元に資料といえば、VPの攻略本とVP2のうすぺらいゲームの
オマケしか無いから

髪や目の色なんて、ゲームしないとわかりません。
とにかくぜってー長くなるから、寝ててもらおう。

てか、苦労させられたよ、この三部作は！

ええい、ウニ狩りに行ってこい！！

ちよびつと復讐心で書いたら第四の人物が現れた。

・・・君、誰??

てか、こんな大人数同時に動かせません・・・。

続きがぽこつとハマる予感。

非売品が試作品になる・・・???

嫌な予感を孕みつつ、お姉様のお話を読み返す。

続きがぺかつと見えてきた。

書け！書くんた！！カルスタット人！！！！

もう、色んな意味でカンベンして下さい。

血の涙（後書き）

短編で終わるつもりがそうならず。

魂の叫び

全弾放出、そして魂が叫ぶ。

「うおおおおおーーーー！！！！終わったああああーーーー！！！！！！！！」

皆様、日々平穩にお過ごしですか？
なまはげ秋田です。

一人で勝手に血の涙を流し、魂が叫び出す。
そんな、なまはげ秋田です。

まず、エッセイのタイトルを翻訳してもらいました。

「何て便利な電子箱なんだああああーーーー！！！！すげえええええ
ーーーー！！！！」

早く気付け、自分。

翻訳してもらったタイトルをチラチラ見る。何だか嬉しいです。

「おおー！！カッコいいではないか！！ほんのり頭よさげ感がある
うっうううー！！！！」

そんな事言ってる時点で頭の悪さを露呈しているんですね。

そしてふと我に戻る。

「エッセイって、こんなでいいのか・・・???」
そもそもエッセイとやらを読んだ事が無いぞ、自分。

そんな自分でも違う気がする。もんのすごくする。
不安不安不安。現実から逃げなくては。

カルスタット式エッセイとは！この様な形式なのだ！！

そして、しでかしたんですな。

てか、何でこうなんだろうか・・・。

自分は至って真剣に推敲しているのに・・・。

お姉様も、真剣に推敲していたら、

「やあやあ、僕は王呼の秘法だよ。」

・・・え・・・・・・？？？

「えええええー！！！！でも、楽しそうだから、書くぜえええー！！！！」

何故、何故にこうなんだ、自分。

皆さんはこんな事、有りますか？

「自分だけこんな性癖は嫌だああああー！！！！！！」

そもそも文章を夜に書くと碌な事がない。

これも自分だけの性癖なのだろうか。

「うおおおおー！！！！全てが特異ではないかああああー！！！！！！」

書いた文章大暴れ。

推敲は一応世間が明るい時にする、と決めている。

初筆を昼間書いて、昼夜を問わずにちよこちよこお直しして、最終推敲を昼間するのが自分の理想的なパターン。

昼間と夜では初筆も推敲後の文章も明らかに違うんですな。

時間が無くて夜に初筆をし、最終推敲も夜でないと出来ない場合もある。

だが、何度かの推敲で昼間の推敲は必ず入れるのだ。
そうしないと、とてもじゃないが読めたもんじゃない。

でも、自分の書いた文章を昼間読むってもののすごく勇気が必要なんですな。

「ちゅどーーーん！」

読んで顔面爆発。

「毎度の事に慣れねええええー！！！恥ずかしいいー！
ー！！！！」

一人、電子箱の前で悶絶する。

――――

物を書くというのは孤独な作業であり、難しいものだ。
自分で納得して選択した設定でも、他の人から見れば「は？」とい
う設定になっている。

それを覚悟で選択したのだ。全ては自分に帰す。

そして選択した以上は、書き上げ、洗濯し、最低でも自分が納得し
てアイロンをかける。

漢字。たかが漢字、されど感じて行間が変わってくる。

どの漢字、感じを選択するか。自分で決めなければならない。

人名はカタカナだ。だから擬音はなるべく使わない。

使うとしたらひらがなにする。

これはいい擬音が思いつかないのと、全体の印象と流れでそう決め
た。

逆に漢字は硬質な表現をしたつもりだ。

その漢字で表現するか外来語を使うか。これも難しい。

長靴でいくかブーツでいくか、短刀でいくかナイフでいくか、等々。

そんな選択を自分で全て行わなければならない。
誰も助けてくれない。誰のせいにも出来ない。

今迄読むだけであつた小説。いざ書くとなると、なんと難しい事か。

――終わりよければ全てよし――

昔の人が言つた言葉。

とにかく拘つたのは話の終わりだ。

連続する話の場合は引きをどうするか。

拘りすぎて首を絞めるさ、ああ、そうさ。

とにかく一つ一つの引きと終わり、そして全体の終わりはキッチリ
締める。

そうすれば、何とかなるだろう。

しかし・・・思いと現実はかけ離れているもんですな。

「なんちゆう事だああああ――！！全然引いてねええええ――
――！！」

読み返して自分がドン引き。

大体人名だけならまだしも、「異名」という輩がいる。

「お願いだから、勘弁してくれええええええ――！！
意識して使い分けろというのかああああ――！！！！」

出来ません。無理ですってば。

そして例の奴等が文章のあちこちにいるんですよ、ええ。

「貴っ様らああああ――！！まだ出るかああああああ――
！！！！」

たのんます、もう出ないで下さい。

――

色々裏話でも書こうかな、と思っていたんですが発酵した発想を書く

「フツ、似非エツセイになるぜ。」

山○君、座布団何枚くれますか？

そもそもカルスタット式エッセイは脳内麻薬がうまくりで異様なハイテンション中ではないと

「書けないですうううううううー！！！！！」

何はともあれ、持っている弾は全部撃ち尽くしました。

まあ、残っているのがあるにはあるんですが……。

例のアレと、例のソレと、例のコレが・・・。

U19C-U1N

ふんぎりがつかない・・・。

これは自分的に顔面爆発どころの騒ぎではない、

「自爆番外三部作」なんか語呂がいいですね。

「自爆するがいい。」

・ ・ ・ おでん、今何だった？

「変態合戦で負けたおでんには言われたくねええええー！！！！！！」

どんな戦いだよ。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

血の涙を流し、魂で叫びながら書いた文章を

今まで読んでくださった皆様、本当に有難う御座います。

イメージが壊れたという方は本当に申し訳ありませんでした。

暖かい気持ちを頂き、電子箱の前で泣きました。

アドバイスに気付くのが遅くて、電子箱の前で叫びました。

「読んでもらえる」大いなる励ましでした。

「なまはげだけに禿増しとはこれいかに。」

お後が宜しいようで。

魂の叫び（後書き）

物を書く。辛い、苦しい、だが楽しい。多分それが一番大事。

再び

皆様、一日一度は笑顔で過ごす時間をお持ちですか？

一日最低一度、出来れば何度も

笑顔の時間を持ちたいものです。

なまはげ秋田です。

もう書くことは無い（「ネタが無い」）と思っていましたが、

やはり血の涙を流し、魂が叫びます。

書いてしまいました。

そんな、なまはげ秋田です。

今回は「ある意味、創作活動」という事で。

- - - - -

文章が一段落つき、ずっと文字とにらめっこだった体を癒そうと、
海や山にお出かけしました。

カメラを持って。ええ、いわゆるデジカメです。

何たらレフとかいう大層なものではない、フツのデジカメですが、
天晴れ見事にハマりました。

「えええええー！！！！今頃おおー！！！！」

自分で自分が笑える。

自然は美しいんですな。

山に行けば鳥の声や川の流れる音がいたします。

海に行けば波の音や風の通る音がいたします。

時はゆっくり流れます。

「癒されるうううううううー！！！！」

さすがに一言しか叫ばない（叫ぶなよ、おい）。

- - - - -

写真を見ていたら、唐突に絵を描いてみたいと思った。
確かどこかに誰かの道具があった筈だ。
あった、あった。引っ張り出してみる。

筆の毛がごっそり抜けた。

「生禿だああああー！！！！！！」

この筆、只者ではない。

道具は化石となっていた。発掘作業もめんどくさくなってきた。

「そつだ、電子箱なら良い知恵があるはず。」

最初からそうしろ、自分。

まあ、何と言う事でしよう。お絵かきソフトが盛りだくさん。

「こ、これは・・・すげえええええー！！！！！！」

頭の中で写真がステキ絵画に変身しております。

よくわからんが、いくつかダウンロードしてみた。

そして説明も読まずに鼠チュウチュウを動かす。

「うわー！！うにようによしたらそのまま出たああああー！！！！！！」

面白いではないか。

写真だよ、写真。撮った風景が画面に真っ正直に出るんでっせ、オニイさん。

絵画だよ、絵画。うにようによしたら画面にそのまま出るんでっせ、オネエさん。

脳内麻薬がうまくり、異様なハイテンションになる。

暴走暴走暴走。もう、色んなモノが脳内で踊りだしている。

「早く夢から醒めろよ、自分……。」「踊りは止まらない。」

- - - - -

しばらくして絵画全開中は鼠チユウチユウが使いづらい事に気付いた。

「もっと便利なものはないのか！ある筈だぁー！！！」
ありました。

お値段をみてドン引き。

「・・・た・・・高くないか・・・？」

自分の欲しいものと変換してみる。幾つか手に入るぞ、おい。

「だがなぁ、欲しいんだよぉおー！！！！！」

エへ、買っちゃった。

これで写真がステキ絵画に・・・なる訳がない。

「ああ、自分の絵なんてこんなもんだ・・・。」

人間諦めが肝心だ。

でも世の中にはヘタウマというジャンルがなかっただろうか。

「ひっかかりもしねええええー！！！！！」

きつぱりすつきり夢から醒めた。

説明をまず読むのが基本なのでは？

「読んでもないのに使いこなせる訳ねええええー！！！！！！！！！！」
「！！」

出だしから道を踏み外している。

- - - - -

便利になった世の中。

だが、道具というのは使いこなさなければ意味が無い。

そこは昔から変わらないんだろぅなぁ。

発掘した化石の埋め戻し作業をしながらしみじみ思いました。

メカ音痴が機械に戦いを挑む事自体、無謀です。

再び（後書き）

だが挑む。そんな自分の意気やよし。

書いた

懲りもせず、戦いを挑んだ。

夕焼けというマットの上で、デジカメに挑んだ。

完全勝利する為に撮影場所を探していたら携帯にメールが来た。

「この空を飛んできたのか。」

そう思った瞬間、ぺろっと頭に浮かんだ。

それがあれである。

「突然すぎだああああ——！！！！」

浮かんでしまったものは仕方ない。

「しかも全部文字でかよおおおおー!!!」

自分としては珍しい事だ。

「しかし、短いにも程があるうううう——！！！」

超・短編だとしか言い様が無い。でなければ、詩か。

だが、思いついてしまったからには。

「書かねばなるまいいいいい——！！！！」

あれが詩なのか、超・短編なのか。

自分もよくわかりません。

そこは気にせず書きました（相変わらず気にしてないぞ、おい）。

そして戦いは完敗であつた。

ヤツに完全勝利するには時間を必要とする。

だが、いつの日か必ず勝利するのだ。

何故自分は空を見るのか。空は自然だからだ。

まだまだ脳が自然を求めている。
自分の脳内は飢えている。

- - - - -

自分の「創作活動」を一言で言い表すなら「脳内のイメージを文章にする」であろう。

だが、それは自分とってはとてつもなく大変な事なのだ。

イメージ（漠然としたもの）↓映像（具体的に動く）↓文章

エッセイ以外はこの段階を踏んで文章を書く。

地名三部作は話自体は出来ていた（が、小説を書くという前提では無かった）。

故に映像を文章に変換する事のみであった。

短い話は全てが一気に噴出す感じだ。それを同時通訳する。まさに勢いで書いた。

その他の話は、映像↓文章に関して言うならば

白黒映像に着色し（着色というのは、表現する色を決めたり、心情を追ったりという事ですな）

文章に変換するというものであった。

たまに字幕つき映像が出てくる場合もあるが

文字や文章のみは字幕つきより更に少ない。

それらを無理矢理（？）広げる場合もある。

裏話を一つ書きますか。

「朽葉色」の話。

街に出る事は決まっていたが、街着を何色にするか悩んだ。

同じ色を着るとなると、二人の髪や目の色などを考慮して服の色を決めねばならない。

複数の候補の中から朽葉色を決めた時「朽葉色は王者の風を呼び起す」という文章が浮かんだ。

自分が持っている以上に要求されてしまった。
で、全弾放出した後の脳内は、きれいさっぱり何も残っていない、と。

脳が食べてきた自然や経験等を全て文章に変換した。
空っぽになった脳内は、そりやもう飢えまくっている。

お腹が空いたら食べねばならない。

普段の生活も経験も、食しているものではありませんが、
とてつもなく腹を空かせた脳内はそれだけでは足りない。
更に自然を求める。

もっと寄越せと喚きだす有様なんです。

で、そうした得たモノを消化し、消化されたモノが
文章の血となり肉となり細胞へと変化するんですよ、自分の場合は。

例えてみますか。

川の流れを見た。

「永遠の時は猛り狂いながら神界を呑み込んだ。」

打ち寄せる波を眺めた。

「亡失した都市の欠片は打ち上げられる事無く、海底で横たわる。」

ひんやりした空気の中に佇んだ。

「冷たい空気は皮膚を瞬時に凍らせ、咽を通り体の中をも凍らせた。」

こんな感じですか。

まあ文章を書ける様になったという事は、少しは腹も満たされたの
かもしれない。

本当に脳がスツカラカンで、何も書く気が起きなかったし思いつき

もしなかった。

駄目な時はダメダメなんですな。

我儘で極端な脳ではありますが、仕方ないです、ええ。

- - - - -

今回は書いた直後でもなければ現在進行形でもないから、
血の涙を流し魂が叫ぶ事が少なかったですね。

たまにはこんな回があってもいいのではないかと思います。

今迄は十分タイトルに沿った内容であるはずだから、とエッセイを
読み返してみた。

冷静になって読み返す恐ろしさたるや、いかばかりか。

読み返すんじゃなかった・・・。

なんてこつたい、このエッセイは火薬庫であつたか。

爆発爆発爆発。カルスタット人は宇宙の彼方に吹っ飛んだ。

例え火薬庫でも、他人の目から見れば何でもないかもNE。

それより冷静な目で見直す事の方が大切だYO。

・・・グングニル、言うではないか・・・。

「で、なんで思いつくんだよおおおおおーーーー！！！！」
やはり、しでかすか。」

こんな脳の状態で思いつくなよ、自分。

「だからこの性癖は嫌なのだあああああーーーー！！！！」
頼む、カンベンしてくれ。」

今書くと確実に脳がスツカラカンになる。

「だがなあ・・・書くぜええええーーーー！！！！」
何故、書くのか。」

ひよつとすると、このエッセイが原因かもしれない。

「次回があるなら、このパターンはやめるうううう——」

「！！！！」

違う趣で書く事も大切だと思われる。

やめたらタイトルと内容が合致しないのでは？

「またタイトルで首絞めたああああ——！！！！」

「フツ、学習能力とやらが皆無だ……。」

何故、同じ過ちを繰り返す。

書いた（後書き）

そして書く。脳が腹ペコ仕方ない。

そして

マグカップの底に残った珈琲色の液体を見た。

「残りもの・・・残滓。」

黒に近い色の液体が薄くなっている。

だが、香りと味は最後までコーヒーであり続ける。

静かな時と共に去り行くもの。

戦乙女の上はあの後どうなったのか。

漠然としたイメージはあったが、脳力に蓄えが無かった故に映像が出てくる事は無かった。

マグカップを揺らすと珈琲色が揺れる。

映像が動く。問題山積みではあるが取りあえず書いてみるか。

それが「残滓」である。

クール宅急便の車を見た。

「クールダンセル宅急便！」三角帽子の魔術師が杖を振り上げ叫ぶ。

目の前のマグロが凍っていった。

素晴らしいではないか。

この字幕つき映像、捨てるには惜しい、惜しすぎる。

「ミトラとザンデの珍道中」

裏タイトルが浮かびイメージが固まっていく。

短い話し特有の爆発が始まる。

意外な組み合わせが動き出し、文章が後を必死で付いていく。

三角帽子の台詞がタイトルになった。

- - - - -

暑い夏、皆様どの様にお過ごしですか？

脳が溶けると思っても溶ける。

それがなはまげ秋田です。

「一家に一人ミトラが欲しい季節です。」

くだらない思いつき万歳！

そんな、なまはげ秋田です。

相変わらず一歩進んで五歩下がる状態ではありますが、少しずつ脳も回復しつつあります。

何より話を思いつくまでにはなりました。

まあ、この「話を思いつく」というのが自分にとっては非常に厄介である。

話というより、それを書くキツカケがいつ浮かぶか。

自分はいつ思いつくか見当が付きません。

「こういう話を書きたい」と決めてかかると一向に思い浮かばない。上で書いた様に、何でもない時につるつと出てくる。

長い話しになるとコレが非常に辛い。

書こうと意識すればする程、逃げていく。

「無題」でそれを思い知らされた。

以前書きましたが、四文字熟語三部作を書きながらお姉様を書いていました。

推敲パワーはあっちに費やしたいから、こっちは推敲そっちのけで書きました。

とにかく書いたんです、ええ。

途中で脳はものの見事に止まりました。

お姉様とおでんのイメージはあるんですが、動いてくれないんです。動いたとしても、映像にどう色をつけ、文章に変換するかとなると皆目見当がつかない。

どうにか最後まで目鼻立ちだけでも、と思えば思っ程進まない。そして地獄を見た。

あくまで自分の場合であるが、一つの話に集中すると脳は他の刺激を求めろのだと思う。

脳が凝り固まらない様に。

だが、あっちもままならないのに、こっちも詰まるというのは最悪だ。

解きほぐす筈が両方固まってしまった。

それでも何とかならないかと足掻く足掻く足掻く。

あざ笑うかの様に脳は硬直硬直硬直。

こっちの続きを書く事はきれいさっぱり諦めた。

生活密着型の思いつき脳は我儘気ままである。

「思いつく時とそうでない時の差が激しいのう。」

脳よ、オヤジギャグ思いつくなら別の事を思いついてくれ。

- - - - -

腹ペコ君の自分の脳。

普段の生活も食している。

自然も食している。

それが血となり肉となり細胞となる。

「書く」を前提にそうしているのではない。

普段の生活はあくまで普段の生活であり、

自然の中に身を置くのも、心身が求めているからそうする。

折角の夏だ。

今年の夏を満喫しようではないか。

今年の夏は今年だけ。今年の秋も今年だけ。今年の冬も今年だけ。

月日を重ねるといふ事は一瞬を重ねるといふ事であり

過ぎ去った時は二度と来ない。

来年の夏を迎える時、無数の重ねた一瞬が今年の夏との間に横たわる。

ボーッと過ごすのも、計画立てて過ごすのも、
「経験」の血となり肉となり細胞となる。

今回は違う趣で書いてみました。

なんだか別人が書いたエッセイみたいですな。

自分も一度スツカラカンになったから、

次の段階へと進んで行けたらいいですね、ええ。

そしてなまはげ秋田式、セカンドステージへ・・・。

「簡単になれる訳ねえええええ——！！！！！」

「忒忒って何じゃあああああ——！！！」

「セカンドステージの意味を答えろおおお——！！！」

だから・・・

「答えられませー！！んんんんん！！！」

そして血の涙を流し、
魂が叫ぶ。

「タイトルと内容が合致しないと嫌なんだよおおー！！！！！！」

そして（後書き）

合致しているかどうかは自信無し。

踏み出す。

「視界オールクリアー。（とは言いはない）」

「目標特に無し。（いつもの事だ）」

「第一、第二、第三砲門解除。（後は野となれ山となれ）」

「全砲門、発射ああああー！！！！！！（三つしかないぞ、おい）」

全てを打ち尽くし、今我には恐るるものは無し！

弾は不発だ、なまはげ秋田。

たまには強気で、なまはげ秋田。

多摩は地名だ、なまはげ秋田。

「漢の浪漫、自爆スイッチ入りました。」

そんな、なまはげ秋田です。

- - - - -

「折角出演した訳だし、豹の色彩でも決めるかのう。」

ある日ある時、脳が珍しくヤル気を出した。

でもって、久しぶりに電源を入れてみたんですよ、ええ。

茹でタコになりそうな暑さの中、起動させたんですよ。

確か仲間にしてた筈だと、終盤のデータを出してみた。

前でガン飛ばす黒い金平糖、解体する気満々のディパン姉妹、後ろ

は便利屋オセロ魔術師。

おお、お目当ての豹がいるではないか。

早速画面に呼び出してチェックする。髪の色は記憶の通りだ、イケる。

瞳は・・・。

「はい？」

ちょっと、待ってくれ。

「…………潰れて…………見えません…………。」

仕方ない。ここは一つ、心の目でだな…………。

「見えねんだよおおおおお………………！！！！！！」
アウトです。

暑い中、ヤル気を出したのに、この仕打ちは…………。

「無えだろおおおおお………………！！！！！！」
ツィアウトです。

もう、全てが…………。

「終わったんじゃあああああ………………！！！！！！」
攻撃終了です。

自分的にはオイシイ場所にいる雲豹だが、決まらないものは仕方ない。

書いてから4ヶ月以上は経つというのに、未だ決まらないではないか。

何せ引き出しが少ないから、自分の脳は話のキツカケをそうぼんぼんとは思いつかない。

折角出た思いつきはなるべく生かしたいのではあるが、無理であると判断した。

出来れば、非売品とリンクさせたかったが。

「そんな姑息な考え、捨ててしまええええ………………！！！！！！」
「！！」

血の涙が出る。

このまま決まらず、色々アレコレし出したら

「ズツパリ切つちまえええええ——！！！！！！」

この際だ、起爆・誘爆・自爆スイッチを

「入れてしまえええええー！！！！！」

ぶっぱなした次第です。

この「血の涙と魂の叫び」は創作活動の際、自分はどのようなかを書いたエッセイです。

ネタ帳を見られている様な、家政婦に見られている様な、なんとも例えようの無い、カルスタット人が書いた赤面エッセイです。

そして、自分の創作活動がどういうものか、文章を書く際どうなるのか、全て書きました。

従って、もうネタがありません。

思いつきりネタがありません。

五七五的あとがきも、ネタがありません。

最後に一つ、書きますか。

発想という大袈裟なものではないが、「思いつき」について。

まず、地名三部作は不死者王の歳があまりにも若かったのがキツクでした。

「不死者王になって、数百年……。」

それは無いだろ、さんえーさんよおおお——！！！！！！

「！」

で、冒険者が「昔、あなたに会いました」と告白(?)している会話を聞いて

「ファルクス説を、自分は採るうつううつう――！！！！！！」
コレですよ。

四文字熟語三部作はあの、アヤつけてる会話がキツカケでした。

「君達、再会した後は……」

案外収まる処に収まったりしやがれええええ――！！！！！！
……ソレです。

「この筋肉戦士が、昔売れない芸術家だったら面白い……」

んでもって、特異な運命をお姉様に刻まれたら

「盛り上がるぞ、自分的にはああああ――！！！！！！」
もう、アレですな。

その思いつきを偽造、捏造、不法改造した訳です。

で、その際に畳をひっくり返す様な自分なりの解釈を入れたんですよ、ええ。

Aと思わせという実はBでした、というヤツですな。

この「畳み返し」、二回返して「元と同じ」になっているんですがね。

「ひっくり返す意味がねえええええ――！！！！！！」

でも、ひっくり返したいではないか。

「畳が重たいんじゃないやあああ――！！！！！！」

じゃ、やめろよ。

「それも嫌なんだよおおお――！！！！！！」

――

創作活動の寝言、泣き言、恨み言を読んでもくださった皆様、有難う御座いました。

小さな一歩ではありますが、踏み出せそうです。

「心の目」で見ている部分が多々ありますが、そこは目を瞑っても
ええたら嬉しいです。

最終話記念、オセロ魔術師で行くか。

「ネーミングセンスが無いのう。」

脳よ、わかり切っている事を改めて言わないでくれ。

踏み出す。(後書き)

最後まで、自分の脳は非協力。

・
・
・
転んだ。

血の涙が出る！！

魂が叫ぶ！！！！

「うおおおお——！！！！！！！！」

カメラが！カメラがあああああ――！！！！！！！！」

天に昇れ、我が思い！！

地に刺され、我が叫び！！

「お代官様の逆襲うううううー！！！！！！」

お久しぶりです。なまはげ秋田です。

こっちを書く予定は無かったんですが、

あまりのあまりっぷりに、タイピングする指先に力を込めて、万感の思いを込めて

ぴっちこぱっちこ打っている。

そんなまはげ秋田です。

[illegible]

遂に、お代官様がお怒りのあまり自爆しちゃいました。

いえね、単に冬を満喫していただけなんですよ。

葉っぱの全く無い木とか、茶色い山とかを写していたんですよ。

舞い散る枯葉は全然撮れませんでしたけど、ええ。

それでもって久しぶりに「彩雲」と遭遇したんですね。

「彩雲」って、意識して空を見たら割りと出会えたりしちゃうんですよ。

しよっちゆうつて訳ではないんですがね、見れたら、そりやもう幸せな気持ちになれまして。

昔から吉兆とされるって言うじゃないですか。

あ、今の社会情勢だと「吉兆」は逆に不吉か。
 ・ ・ ・ ・ ・
 だから ・ ・ ・ なのか ・ ・ ・

えーと、その「彩雲」を意識して初めて見て写せた時は、そりやもう天に昇る気持ちだったんですよ。

そいでもってその日も久しぶりに見えた訳でして。

必死で撮りましたとも、ええ。

あまりに眩しくて眼が潰れそうになりつつもね。

すぐ消えちゃったから、2、3枚しか撮れなかったんですが、何とか写して

家に帰って取り込んだ次第です。

画面を見て我が目を疑った……。

「……変なモンが……映つとる……」

ちよつと待ってくれ、これは何なんだ?????

科学では解明できない摩訶不思議現象???

だが、違う風景でもおんなじ場所に映っているぞ???

[illegible]

そうだ、錯覚だ、それしか考えられない。

とりあえず目薬さして、
気分を落ち着けるよ、自分。

あれだけ眩しい思いをしたんだ、目も疲れてへとへとだろ。

ぶつすーと目薬さして、ティッシュで抑えて。

見てみよう。

「錯覚などでは無い——！！！！！！」

嘘だろ、マジかよ、カンベンしてくれ。

カメラに対する恨み節を「詩」などと称して書きちゃったからか？
頭が凄い勢いで回転してますがな。文章書く時はこんなに回転しないくせに。

自分の脳は何処まで非協力なんだよ。

などと思いつつ、白い紙袋にカメラを構えて液晶を覗いたら……

「やっぱり、ナンか映るがなあああー！！！！！！！！！！」

これはレンズに埃がくつついているからじゃないか。

そうだ、拭き取ればいい。

ティッシュじゃ埃が付くから意味が無いぞ。

うにくろのフリースなら、柔らかし、静電気作用で埃が取り除けるのではないか。

とりあえず、拭きました。

さて、紙袋も美しく液晶にお出ましになるぞ。

ほれ出てきなされ、紙袋。

「全っ然！ダメええええええー！！！！！！！！！！」

お代官様、初日の出激写の予定が……。

「越後屋の都合になど、合わせてはおれぬわ。」

また彩雲に出会ったら、どうすればいいのでしょうか……。

「その目でしかと見るがいい。」

雲間から洩れる光のカーテンは……？

「思い出は色褪せぬぞ？」

……この極悪人……。

「黄門様を呼びますぞ……。」

越後屋は最終手段に訴えた。

「一蓮托生であるぞ、越後屋……。」

「もう捨てるものなど、何も無いですからな。」

「そちの予定がオシャカになってもよいのかな？」

「もとより無かったものと思えば苦になりますまい。」

「つまらぬ意地を張るでない。」

ひゅーーーーー、カツ!!!

「こ、これは風車……。」

「話は全部聞かせてもらったぜ。」

「呼ぶ手間が省けましたな、お代官様。」

「助さん、格さん、やってしまいなさい。」

「くつ、であえ、であえーーーーー!!!!!!」

年末で牢屋はお代官様だらけだそうでした。

うちのお代官様、当分順番が来そうにないです。

この年の瀬に、見事にスツ転んだ。

「一年のオチがコレかあああああーーーーー!!!!!!」

・・・転んだ。(後書き)

「越後屋は？」

「牛乳瓶の底です。ご隠居。」

「矢七、どうしたもんかのう。」

「放っておくが吉かと。」

「それもそうじゃの。かっかっかつ。」

自分の脳はいつもこいつも非協力。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490c/>

Tears of blood and Calling out of soul

2011年10月3日19時44分発行